

女性の学習と公民館保育を考える視点

藤沢市六会公民館 (当時) 秦野 玲子

月刊公民館 96年12月号への寄稿

公民館で小さな子を持つ母親を対象とした学級に、保育をつけることは、かなり一般的になってきている。

その保育も単に条件整備の場としてとらえられるのではなく、保育室に子どもを預けて学ぶことにより、自分自身の暮らしを見直し価値観の変化をともなう、親子ともに成長する場として機能することの大切さは、認識されてきている。

公的社会教育の場である公民館保育室が「子どもを預けて一時的に身軽になれる便利さ」だけを追求していたのでは、「学習に参加しにくいのは、小さな子を抱えた専業主婦に限らない」という批判に対して答えられないのだから。

しかし、保育室での活動を学習の場とつなげることに関しては、まだまだ課題が多い。

乳幼児家庭教育学級では、参加者が乳幼児を持つ親（特に母親）に限定されているので学習内容や運営を「子どもどう預けるか」という保育室の活動と、即、結び付けられる。

だが、女性セミナー（婦人学級）等ではどうだろうか。女性問題を学ぶ機会をより多くの人にと、保育をつけることが増えてきたが、子どもを安全に、一定時間預かる機能だけの保育室になりがちなのではないだろうか。

子どもを預けることをとおして、母親が自分の暮らしを問いなおすという視点、また、成長の場としての子どもの立場から見れば、保育室の活動と学習の場を結ぶことの大切さは乳幼児家庭教育学級も、女性セミナー（婦人学級）も、同じでなければならないはずだ。

それなのに、女性セミナー（婦人学級）は必ずしも子どもを預けて学習している参加者だけでないという理由で、学習と保育を切り離している場合がほとんどなのではないか。

女性の公民館の職員からして「子どもを預けていない人には、保育室のことは関係ないのだから、そんなこと（傍線筆者）を学習の場に持ち込んで迷惑だ」という発言をしているものもある。「子どもを持っていない人も参加しているかもしれないのだから、保育室に預けることをとおして母親の成長を考えることなど、女性セミナー（婦人学級）の学習に入れてはいけない」のだと。

本当にそうだろうか。

何も、子どもを持ち、子どもを預けることだけが、女性の成長に役立つのだと言っているのではない。

あらゆる立場や状況の女性を分断することなく、女性をとりまくすべての問題を、女性が、共通の課題としてそれぞれ自分にひきよせて考えていかなければ、解決していく力にならないと考えているのだ。

そもそも女性の人間的な成長を、子どもを持つこと、持てないこと、持たないこと、を基準に論じること自体がおかしなことではないか。

過去、女性を未婚か既婚か、専業主婦か働く女性かといった状況で分断し、対立関係としてとらえた記事や学習も多く、女性同士の対立や論争になったことも少なくなかった。主婦論争ばかり、アグネス論争ばかり。

同じ性を持つ同士が、なぜ分断されなければならないのか。互いの状況に想像力や理解をよせることなく、なぜ、二分されなければならないのか。どんなことにせよ、体験がなくしては、何も語れない、ともに学習することすらできないのだろうか。

障害を持つ人の問題を、健常者が学習することは無駄だろうか。戦争を体験していない世代が反戦を語ってはいけないのだろうか。専業主婦が、職場のセクシャルハラスメントを論じる必要はないのだろうか。両親をなくした人は、老人介護の問題に耳をかさなくていいのだろうか。

すべて、否、である。

体験そのものに価値があるのではなく、体験から何を引き出して何を引き受けるかということにこそ、価値があるはずだ。

体験至上主義からは何も生まれない。どんな立場の、どんなにちいさな痛みでも並列に考えていけることこそ、一人ひとりを大切にすることなのだと思う。

要介護老人をかかえていることも、仕事に追われ、自分を潤す時間すら持てないことも母と子が、拘束しあって暮らしていることも単に個人的なレベルとしてとらえていたのでは、福祉の貧困さを家族愛にすりかえることを許すことにつながり、社会的な活動のレベルに発展してはいかない。

個人レベルの問題をいかに普遍化し、普遍的な問題を、いかに個人レベルにひきよせるかが、公民館の学習、特に、分断され、孤立化し、力を奪われてきた女性の学習に、最も必要な視点であると思う。

学習を共にする仲間が、どんな状況であるのか、どんなことをとおして成長しようとしているのか、それを阻むものは何か、どうすれば互いの問題として解決する力に変えていけるのか。

それを手助けすることが、公民館の学習に一番求められなければならないはずだ。

結論にたどりつくまで、少し長くなってしまったが、つまり、公民館の保育室で子どもがどう育つのかを考えていくことは、実際に子どもを預けているかいらないかで、分けられるようなことではないということだ。

子どもの成長や女性の暮らしの見直しにつながる保育室活動を「子どもを預けて学習するという体験」をしている人も、していない人も、ともに考えていけることが、学習者自身にも求められている。

そして公民館職員には、それを学習の中で認識できるように運営する手腕が求められていることを、忘れてはならない。

一例として六会公民館女性セミナーでの試みを紹介する。

どうすれば学習者（子どもを預けている参加者よりも預けていない参加者の方が多い）が自分たちの意志で、保育室の活動を「この仲間で、ともに学習できるためにある大切な活動」であるにとらえ、一緒に考えられるのかを、保育者と職員とで話し合った結果、保育室の活動の様子をレポートにまとめ、学習者全員に渡すことにした。

読んでくることを強制はせず、2週間後に保育者と話し合う時間を、学習時間終了後にけることだけを伝えた。

当日、12時を過ぎた時間にもかかわらずほぼ全員が残り活発な話し合いがもたれた。

子どもを預けていない学習者も、丁寧にレポートを読み、意見をのべ、子どもを預けている参加者は、個人的な条件整備でないことを、改めて認識していた。

以上、女性の学習、特に、参加者の年齢の幅が広い学習と、公民館保育の取り組みについて述べたが、私自身もまだ試行錯誤の最中なので、他の事例も、是非ご紹介いただきたいと思う。